

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

大学授業における学期を通じた  
学習内容の振り返りを促す手法の開発と実践的評価

A Development and Evaluation of Methods to Promote  
Reflection through the Course in Higher Education

2018年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科  
森 裕生  
MORI, Yuki

研究指導教員： 尾澤 重知 准教授

本研究は、大学授業を対象に学期を通した学習内容の振り返り手法を開発し、実践的な評価を行った研究である。開発した手法は「研究1：マトリクスを用いた学習内容の構造化」「研究2：評価基準を学生が設定する自己評価課題」「研究3：時系列自己評価グラフを用いた振り返り」の3手法であり、各手法はZubizarreta (2009)の学習ポートフォリオの枠組みに基づいて「振り返り（リフレクション）」「エビデンス」「コラボレーション」の3つの要素が含まれる形式であった。本研究は以下に示すとおり全7章から構成された。

第1章では、序論として本研究の背景をまとめた上で、本研究の独自性と目的を述べた。本研究の背景は、以下の2つの観点がある。第一に、社会的背景である。大学教育のパラダイムの転換を軸として、大学設置基準の大綱化などに関する大学を取り巻く環境の変化を整理した。

第二に、学術的背景である。学習に関する研究の発展、大学教育におけるアクティブラーニング、大学教育における学習内容の振り返り、学習ポートフォリオを用いた学習内容の振り返りの順に整理した。

学習に関する研究の発展により、学習を促進する仕組みや方法に関する知見が蓄積され、大学授業も変容が迫られた。それに伴い、アクティブラーニングが大学授業で導入されるようになった。アクティブラーニング導入の課題として、活動だけでなく学習内容の振り返りまで考慮しデザインする必要がある(Fink 2003)。この点を踏まえ、大学授業における学習内容の振り返りを促す手法を整理し、学期を通した振り返りを促進するために学習ポートフォリオに着目することを述べた。また、学習ポートフォリオの大学授業での研究・実践事例を概観した上で、「振り返り（リフレクション）」「エビデンス」「コラボレーション」の3つの要素が含まれるZubizarreta (2009)の学習ポートフォリオの枠組みを用いることについて述べた。

以上の背景を踏まえ、本研究では学習ポートフォリオを活用し学期を通した学習内容の振り返りを促す3手法(研究1~3)を開発した。本研究の目的は、研究1~3において学生がどのような振り返りを行ったかなどの、学生の振り返り活動の特徴を明らかにすることである。

第2章では、本研究の対象と開発した3手法の位置付けなどを述べた。本研究は大学の授業実践を対象とした実践的研究である。2013~2015年度に首都圏にある総合大学P大学Q学部で開講された授業A(テーマ：学習環境デザイン)と授業B(テーマ：情報社会、キャリアデザイン)を対象に研究を行った。いずれの授業も授業中に演習課題の回答と、学生間で回答の共有やディスカッションを行うアクティブラーニング型授業(溝上 2014)である点に特徴があった。また、開発した3手法は、それぞれ学習ポートフォリオを活用した手法ではあるものの、対象とした授業の範囲が異なっていた。各研究が対象とした授業の範囲は図1に示すとおりである。

第3章では、本研究の方法について述べた。本研究の目的は開発した各手法を導入した授業で、学生がどのような振り返りを行ったかなどの、学生の振り返り活動の特徴を明らかにすることである。この点を踏まえ、主に学生の学習成果物を対象とした質的なアプローチで研究を進めた。第3章では、教育工学分野の研究手法や質的研究などを概観し、本研究で行った分析の手順の例を示した。

第4章では、研究1として「マトリクスを用いた学習内容の構造化による振り返り手法の開発と評価」の研究について述べた。研究1の概要は以下のとおりである。

最終回の授業において、学生が各回の授業で作成・提出した演習課題の回答などから授業において重要だと考えたキーワードを抜き出し、それらのキーワードを用いてグループでマトリクスを作成し

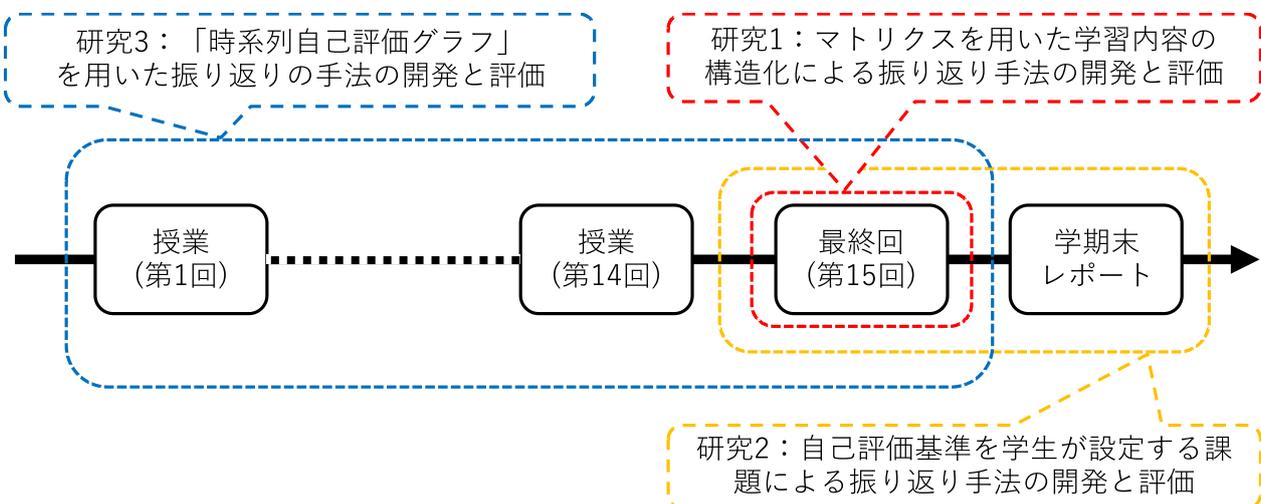


図1 研究1~4の結果の概要と対象授業の関係

学習内容の構造化を行った。マトリクスの評価基準を集計し分析を行った結果、評価基準には抽象的概念が多く用いられること、約68%のマトリクスにおいて評価基準に対立する概念が用いられたことなどが明らかになった。これらは、マトリクスの評価基準が交点から離れるほど、その度合いが高まることや、1つの軸に2つの評価基準を持つマトリクスの特徴が影響していると考えられる。

第5章では、研究2として「自己評価基準を学生が設定する課題による振り返り手法の開発と評価」の研究について述べた。研究2の概要は以下のとおりである。

学期を通した学習内容の振り返りを促進するために、学生が「自己評価基準」「自己評価点」「自己評価基準の説明および自己評価点の根拠」を検討する学期末レポートを取り入れた大学授業を2年間にわたり研究対象とした。1年目は最終回の授業で授業前と授業後の学生自身の「成長」に関するワークを、1年目の実績に基づき学習内容に着目した振り返りを促進するために、2年目は授業デザインを変更し演習課題を通して身につけた「能力・スキル」に関するワークを導入した。

学生の提出した自己評価課題を質的に分析した結果、1年目は自己評価基準の51%にグループワークや演習課題の取り組み等の「授業形式」に関する自己評価基準が取り上げられた。授業デザインの変更を行った2年目は「授業形式」に関する自己評価基準は13%に減少した。また2年目は1年目と比較して(1)授業外で授業内容の応用に関する自己評価や自身の演習課題の回答などの学習プロセスに着目した自己評価が行われたこと、(2)自己評価基準の説明および根拠として、学生自身の学習プロセスと授業外での知識の応用に関する活動を融合させながら自己評価が行われたことなどが明らかになった。

第6章では、研究3として「時系列自己評価グラフ」を用いた振り返り手法の開発と評価について述べた。研究3の概要は以下のとおりである。

学期を通した振り返り活動を促進するために、学生個人の各授業回と学期末の理解度の自己評価点の「ずれ」に着目し、「ずれ」の理由を記述させることで振り返りを促す「時系列自己評価グラフ」を開発した。本研究では大学授業2実践を対象に、学生が作成した時系列自己評価グラフを質的に分析した。その結果、(1)全体として学期末の自己評価点が各授業回の自己評価点より10点程度低い「ずれ」が生じること、(2)学生は「ずれ」の方向に従って異なる振り返りを行うことが明らかになった。プラス方向のずれ(学期末>各授業回)の場合は、学期を通して学習内容を関連付けた振り返りが、マイナス方向のずれ(学期末<各授業回)の場合は、理解不足だった内容についての振り返りを行ったことなどが明らかになった。

第7章では、結論として第4~6章(研究1~3)で述べた各手法の結果を横断的にまとめと考察を行った。本研究は、学習内容の振り返りに着目した研究であることを考慮し、学習内容の振り返りに関する2観点で考察を行った。第一に、「アクティブラーニングと学習内容の振り返り」の観点で考察を行った。アクティブラーニングを授業に導入する際の課題として挙げられる「知識(内容)と活動の乖離」(松下 2015)について述べた後、本研究の結果と「知識(内容)と活動の乖離」の関係や特徴について検討を行った。具体的には、研究2の1年目では、学生がアクティブラーニング型授業の形式に着目した振り返りを多く行っており「知識(内容)と活動の乖離」に陥った可能性が指摘される。そのため、2年目では演習課題をとおして身につけた能力・スキルに着目した振り返りを導入したことで、学習内容に着目した自己評価を行った。この結果や研究1, 3の成果を踏まえて、アクティブラーニング型授業における振り返りについて「エビデンス」の活用方法の特徴を整理した。

第二に、「学習ポートフォリオと学習内容の振り返り」の観点で考察を行った。Zubizarreta (2009)の「コラボレーション」は、振り返りを促進するためのメンターの存在が重要であるとしている。本研究は大学授業においてメンターの確保や育成は授業実践上困難である点を考慮し、学生同士のグループワークが「コラボレーション」の役割を担うようにデザインされた。そこで、研究1~3において、学生同士のグループワークが促進する振り返りの特徴について整理した。また、各手法は「図式化」と「学習プロセスの説明」の異なる2種類の振り返りを促す手法の組み合わせであった。一方で、その組み合わせは各手法によって異なっていたため「図式化」と「学習プロセスの説明」の組み合わせと振り返りの特徴を手法ごとに整理した。その上で「図式化」を行った後に「学習プロセスの説明」を行うことがより振り返りを促進させる可能性があることについて述べた。

最後に、本研究の結果を活用した大学教育への提言を行った。ディプロマポリシーなどの大学生活全体で身につけるべき能力が議論されている一方で、前向きアプローチ(白水 2013)の観点では、そのような能力に到達したかどうかだけを評価することは不足があると言える。それに対し、本研究で開発した3手法は前向きアプローチで自身の学習の評価を行っていることに特徴がある。学生自身が到達目標を修正しながら、大学の授業や活動を評価するための手法として、応用・活用可能であることについて述べた。